

国語 文学部、教育学部、経済学部

□一 現代文

問一 a リユウチョウ b シヤシヨウ c 眺 d ハバ

e 発揮 f 繊細 g 配慮 h シツヨウ

問二 (1) エ (2) エリスにと があるのだ。

問三 吃音を単に障害として捉えるのではなく、人種、ジェンダー、階級など複数の視点を組み合わせる「交差性」の考え方に立つことで、その障害が自分にとって持つ意味の複雑さを探究することが可能になり、その意味が豊かになるということ。(一〇九字)

問四 彼らは社会 くののである。

問五 ウ

問六 (1) 自らの弱さをアイデンティティとして掲げ、権利を主張するばかりで、自らの弱さに向き合わず、豊かな生の意味を生み出すことにつながらないもの。(六八字)
(2) 自分を、自分のことがよく分からないという弱さを備えた存在として認め、経験の複雑さに向き合うことで、自身の生に多様な意味を見出すもの。(六六字)

問七 第二段落…障害とのこ 第三段落…近年、以前

古文

問一 「おぼえ」はヤ行下二段活用動詞「おぼゆ」の未然形、「られ」は受身の助動詞「らる」の連用形、「たてまつり」はラ行四段活用動詞「たてまつる」の連用形で謙譲の補助動詞の用法、「けむ」は過去推量の助動詞「けむ」の連体形。

問二 (ア) 大勢の人々が、一晚中はなはだしく大騒ぎをした、盛大な葵上の葬送の儀式であるけれど、

(イ) もしもこのような忘れ形見である若君までもいなかったならば、亡き葵上を偲ぶよすがはなかっただろうに、と光源氏は若君を見て気持ちを慰めなさる。

(ウ) 平凡で器量のよくない子どもでさえ、その子を失った親はどれほど悲しく思うようだ、ましてや一人娘であるすばらしい葵上を失った親が悲嘆に暮れるのは当然のことだ。

問三 空に立ち昇った葵上を火葬した煙は、はっきりそれだとは区別がつかないけれど、空一面がしみじみと慕わしく思われることよ。

問四 ① 藤 ② 淵

三 漢文

問一 a のみ b すこぶる c ことに

問二 子弟をして以て楷法と為さしむるを恥づ（恥ず）。

問三 丁さんの書いた書十枚の価値は、王褒の書いた数文字にもかなわない。

問四 遂に世の称する（称ふる・称うる）所と為らざるは、亦た是れ奇事なりと。

問五 以前に丁覘の書を軽視していた人々は、後になって丁覘の書いた書一枚を欲しいと思っても、手に入れることはできなかった。

問六 梁の元帝は、自身の文や詩をすべて書の巧みな丁覘に書かせていたが、世間では身分の低さから丁を軽んじて、その才能を評価しなかった。その後、高官が丁の書を称賛して彼の不遇を嘆いたことから評価されるようになったが、元帝の政権が滅んでその書が散逸し、丁も亡くなると、誰も彼の書を手に入れることができなくなった。（二五〇字）